

ドストエフスキーを読む会

2025年4月12日(第327回の報告)

場所: 文京区勤労福祉会館

テキスト: 『罪と罰』第5回

報告者: 松浦 洋さん

参加者: 6名

報告(1)

前回に引き続き、松浦洋さんが3人の評論を紹介しつつ、以下のような報告をされた。

- ・ コンスタンチン・モチュリスキー...ポルフィーリイはラスコーリニコフの机上の空論を証明し、スヴィドリガイロフはラスコーリニコフの道徳的な偽善を突き、道徳の否定をしている。
- ・ 小林秀雄...事件の真の架空性は、夢を試みようとした行為が、少しも夢を破壊してはくれなかったという處にある。恐怖が愛でないと誰に言えようか。
- ・ 江川卓「謎とき『罪と罰』」...スヴィドリガイロフの言動をめぐる考察。

上記3人の評論を通して、ラスコーリニコフ、ソーニヤ、スヴィドリガイロフの関係性、それぞれの人間性に関する議論が交わされた。キルケゴール、ヘーゲル、ドゥルーズなどを引用しつつ、話題は多岐にわたった。

報告(2)

本会はリニューアル後初めての会でした。ここに至るまでの経緯及び私見を簡単に述べさせていただきます。

2024年12月の読書会が終了した時、今後の当会の方針について話が出ました。結論として「本会をこれまで通り続けるのは困難、2025年2月の読書会をもって本会を閉じる」との結論を得て終会となりました(会場設定、会の切り回し役の不足などが理由)。

私が会場を出てエレベーターを降りたとき、そこに一人の参加男性が立っていました。彼はほとんど面識のない私に向かってこう言いました。

「この会がなくなると、僕困るんです。ドストエフスキーは僕の人生の支えなんです」

「人生の支え」という言葉が私に突き刺さりました。私もまたドストエフスキーが人生の支えだったからです。その場で彼の名前と連絡先を聞きました。〈彼のため、自分のために何とか会を続けていく方法はないものだろうか?〉と咄嗟に思ったからです。

このことを考えながら帰途につきました。

この読書会でいちばん大事なのは会を開くための場所の確保です。多くの人が集いやすい場所にあること、定期的に土曜日に借りられること、賃料がなるべく安いことが必須条件です。池袋よりは多少不便かもしれませんが、今回から使うことになった文京区勤労福祉会館はこれら条件を満たしていました。2025年1月、当会館に行って詳細を聞き、借りるについての条件を確認し、4月12日に予約を取ることができました。「人生の支え」と語った彼はその日のために賃料を払い込みに行ってくれました。そして第二回目の予約も取ってくれました。

そんなこんなで何とか歯車が再び回転し始めたのです。宣伝の不行き届きで第1回目の参加者は6名でした。しかし、彼の「人生の支え」の一言がなかったら、リニューアルそのものが実現しなかったのではないかと思います。(世話人梶原記)